

研究題目

ICT教材を用いた祝い着の模様ワークの学習が伝統文化の継承意欲に与える効果

所属機関名

研究者名

横浜国立大学教育学部
横浜市立港南中学校

○薩本弥生
浅野和子

発表要旨

[目的] 和服は日本の伝統文化の一つであるが現代では日常的に和服が着られることは少なく、家庭内での継承機能が弱まっている。この現状を危惧し教育基本法や学習指導要領の改訂により伝統文化の継承の重要性がうたわれ、家庭科でも浴衣の着装実習や模様ワークの授業研究が行われ、これらが着物文化への興味関心や伝統文化の継承意欲を高める効果があることが示された。しかし、従来の模様ワークでは実物の着用を用いるため、普及していない。そこで本研究では、実物の着用が無くても実践できるICTを活用した「模様ワーク」教材とその後に伝統文化の継承について考えるワークを開発した。これらの教材を用いてA中学校で授業を実践し、着装実習前、着装実習後、模様ワークの授業後の3回、アンケートを実施した。また、実物の着用を用いて模様ワークを行うB中学校でも事前と事後にアンケートを実施した。その解析や授業で用いたワークシートの内容から本授業の効果を明らかにすることを目的とする。

[方法] [ICT教材開発] A校の模様ワーク授業の実践にあたりICT教材を2つ開発した。まず模様ワークをPC・タブレット上で行える宮参りや七五三用の5種類の祝い着の教材である。Teamsにシェアし祝い着の写真とそこに描かれている模様の絵を周辺に配置してあり、各模様を探して描画機能を用いてマークできる。次に模様毎に模様が祝い着のどこにあるか答えを示し、模様の名前と意味を解説する教材である。

[A校での授業実践] 2回の授業構成で浴衣着装授業では着物文化に関する講義後、男女各々の浴衣の着付け示範を示したのち、男女各々班に分かれてTAの指導の下、浴衣の着装実習を行った。その後、浴衣を着てお辞儀をするワークを行い、最後に浴衣の畳み方の示範を見て各自で浴衣を畳んだ。模様ワーク授業では、普段は洋服を着ているのになぜ着物を着るのだろうかと問題提起した。その後、お宮参りや七五三の意義や、その時に着る着物の模様に想いが込められていることを伝えた。次に、模様ワークを行い自分の班の着物にはどんな想いが込められているかをワークシートに書き込む。最後のワークとして、もし自分が着物を作るとしたらどんな模様を使いたいと考えさせ、班ごとに紹介し合った。

[B校の授業] B校では家族の単元の一環で模様ワーク授業を行った。お宮参りの時に着る着物には親から子に対する思いが模様や色で表現されていることを伝え、保護者との関係が良好であるか生徒に問いかけ考えさせた。次に和服を着る機会の意義を説明し、実物の着用を用いて模様ワークを行った。

[結果と考察] 両校ともに着物文化や伝統文化への興味関心は女子よりも男子の方が低い傾向にあったが、授業を通して男女ともに興味関心を高めることができた。また、A校において授業前後で興味関心に大きな変化があったのは、浴衣着装授業だった。B校では浴衣の着装は行わなかったため「着物と帯の色・模様の組み合わせ」についての興味関心を高めることはできなかったが、模様や着物文化、伝統文化に関する興味関心は授業を通して高めることができた。

両校を比較した結果、使用教材や授業の流れは異なっているが、模様ワークを用いた授業によって知識を習得することで着物文化への興味関心や伝統文化の継承意欲を高めることができることが明らかになった。また、今回の授業実践においては実物を使った模様ワークの方が取り組みやすかったことが分かったが、さらに研究を重ねていくことでICT教材の有効性は高められると考えられる。

[まとめ] 浴衣の着装や模様ワークは着物文化の興味関心や伝統文化の継承意欲を高めることに有効であることが示された。ICT教材はさらなる改善や検討の必要があるが、模様ワークの普及に貢献できるのではないかと考える。また、伝統文化を継承していくためには、興味関心を持つだけでなくそれらを自らの生活に活かし新たに創造していくことが重要である。A校で行った今回のワークは、伝統文化の継承から創造につなげていくための一助になったと考えられる。